

『見田石介著作集 第一卷

ヘーゲル論理学と社会科学』（大月書店）

角 田 修 一

一昨年八月に急逝された見田石介氏の著作集がこの四月をもって完結した。見田氏がその後半生をささげてとりくんでおられた『資本論』の方法論的研究と「ヘーゲル論理学の唯物論的改作」の仕事は、いわばひとつの境地に達し、さらに詳細な仕上げが望まれていたところで途絶えた形となったが、今日その業績が体系的かつ歴史的に編まれ、後学の私達の摂取すべき材料が整えられたことをまず喜びたい。

見田氏の科学的精神からして、氏がなおその創造力を働かせておられたならおそらくこうした著作集をまとめることはなかったのではないかと推察される。それだけにいま本書作集の完成を前にして、その一部分だけをとりだして評論す

るといふ愚はぜひとも避けねばならず、わたくしたちは氏の業績を系統的・歴史的にとりあげねばならないだろう。しかしながら、見田氏の生前から今日まで、とりわけ死の直前から、見田氏の研究に対していくつかの疑問や批判が出されるようになり、その中には直接氏の著作に答えが見出せるものや、あるいはよく読めば理解できる誤解や、またかならずしも氏のいわれたことを全体的・歴史的にみないで行われているものなどが目立つように思われる。わたくしたちは見田氏が残されたものを絶対化してはならないし、それは見田氏の学問的精神とは正反対のものであろうが、まずその業績を正しく評価しその限界を明らかにする（そのものが何であるかを明らかに

にすることは、そのものの限界を明らかにすることもあるというのはヘーゲルの精神であり、見田氏のうけ入れておられたものである）ために虚心にそこから学ぶことが大切だし、また氏の業績はそれだけの値うちのあるものだと思う。

本著作集には各巻にたいへん有益で詳しい解説が付されているので、浅学のわたくしが何を付け加えることのあるるかという感もあるが、先ほどのような状況もあるので、この欄をかりてあらためて氏の著作にあたってわたくしなりに得ることのできた諸点を述べさせてもらうことにしたい。

## —

本著作集は当初全六巻の予定で発売した（一九七六年十月）が、比較的多くの読者に恵まれたのか、補巻として、著者が若冠二八、九才で書いた二つの著書がおさめられた。とくに「ヘーゲル哲学への道」はその名の示す通り包括的、合理的なヘーゲル哲学への入門書である。この補巻にもう一つ『価値および生産価格の研究』（一九七二年、新日本出版社）が加われば、見田氏の主要著作が文字通り揃うということをまずはじめに指摘しておきたい。

さてここでとりあげようとするのは、本著作集の第一巻「ヘーゲル論理学と社会科学」である。この巻は二つの部分にわけられており、その一つは著者が一九五〇年代初めから「商品の矛盾の理解について」（本著作集第五巻所収）以来とくりくんでこられた「矛盾と対立」とその認識論的研究である。

第二は見田氏が凡ね七〇年代に入って次々と発表された「ヘーゲル論理学の批判的研究」である。内容的にこの二つの部分は、前者は後者を実証する特殊課題であり、後者は前者をも含む一般的課題だという関係にあると思われる。本著作集は見田氏がその存命中にいかなる形においても編集を予定したのではないので、読者はどこからでもどのように読みすすむことも可能だが、他方でそこに明らかにされていることを全体の関連の中に位置づけて把握する責任を負うことにもなる。したがってここでは、本巻の編集の順序とは一致しないが、「Ⅱ ヘーゲル論理学と『資本論』」における主要な点をとりあげる中に「Ⅰ 矛盾論」も含めてあつかおうと思う。なお、引用の際にとくに断らない場合はすべて本巻のページ数のみを示す。

マルクスの経済学を含む社会科学とその方法を理解するうえで、ヘーゲルの論理学が不可欠の媒介をなしていることはマルクス自身が言明していることからわかる。しかしながらわれわれにとってより重要なことは、マルクスその人がヘーゲルの論理学からヘーゲルが発見した核心を取り出し、弁証法的方法を思惟の展開の正しい形式となりうるかたちにつくりあげることができた、ということである。それゆえ、エンゲルスはつぎのように述べている。

「マルクスの経済学批判の基礎をなしている方法の完成を、われわれは、その意義において唯物論的根本見解にほとんど劣らない成果であると考ええる。」(カール・マルクス『経済学批判』、一八五九年八月。国民文庫版『経済学批判』所収)

では一体、マルクスはヘーゲル弁証法の批判からいかにしてその方法を完成しえたか。これが問題である。

見田氏がこの問題で、まず最初に強調しておられるのは、「ヘーゲル弁証法の神秘的な観念論の外皮というものは、それを一皮むけばそこに正しい弁証法が現われてくる」といった

ような表面的な形式ではなく、その観念論はヘーゲルの弁証法そのものに浸透しているのであるから、それから観念論の外皮をとりさるといふことは、それほど容易なことではない。むしろこれがヘーゲル哲学の難解さをなしている」(二一—ページ) ということである。あるいは、ヘーゲルの弁証法をひっくり返すというのは、彼が概念とよんでいるものをただ現実とよみかえればよいといったものではない。(二〇—二三—ページ)

したがって、氏の見方によれば、マルクスの方法を理解するのに、ヘーゲルの言葉や流儀をもってやろうとしたり、たとえば『資本論』にそれらを「適用」しようと試みるなどというのはいくく非科学的な態度である。(この点ではデボーリンに対する評価をみられたい。九五—ページ)

それではヘーゲルの観念論の本質はどこにあるのか、どの点をわたくしたちはヘーゲル主義として最も警戒しなければならぬのか、ということについて、氏は、「要するにわれわれの思考過程を現実の過程と同一視した」(五六—ページ)ということ、ヘーゲルの思考—概念が人間や自然といった現実界からも独立してそれらを生みだす真の實在になっていると

いうことをあげる。しかし見田氏はこの点を単にそういつてしまっただけで、あとはヘーゲルをひっくり返して読めばよいというのではなく、すすんでここに「ヘーゲルの二面的立場」をみている。すなわち、一面として神秘的な見解があるとともに、他面ではヘーゲルのとりあつかう思惟形式が客観的内容を反映しようとし、また一定反映したものである。「唯物論的な要素」(一二二ページ)があるというのである。見田氏はここに、人間の認識が普遍的、必然的な合法則性をとらえられないとする経験論や、認識を単に主観的な形式とだけみるカント主義とは違ったヘーゲルの科学的見解を見出し出している。

ヘーゲル論理学というとにかく難解で頭が痛くなるといわれる。(確かにそうだ)その論理学自体は直接にはわたくしたちの認識の法則性をあつかうにもかかわらず、それがもつ難解さの原因をこのような二面的立場の混在とみ、実際にヘーゲル論理学の中に分け入ってこの点をときほぐしてくれる、これがこの著作集の第一巻の大きな特色の一つであろう。こうした仕事はやはり見田氏ならではのことである。

さて、ヘーゲル弁証法の合理的な核心について見田氏は次

のように考えておられる。

ヘーゲルは、世界のあらゆる事物は、たんに肯定的なものではなく、その内部に自らの否定者を含み、自らの成長は同時にこの否定者の成長でもあるような矛盾物であるとみる。したがって第一に、現実の事物は、やがて自らが内包する対立物に転化せざるをえないものとされる。——事物の変化、自己運動。第二に、これは単なる変化にとどまらず、古いものは新しいものの中に一つのモメントとなっており、新しいものは古いものよりも内容の豊かな一つの全体となっている——発展。第三に、世界の諸事物はたがい必然的な連関をもっている。それゆえヘーゲルにおいては、所与の事物を科学的に認識するということはつぎのような概念的把握によらなければならない。

「そこに与えられた事物や事態を、そうあってそれ以外にありえないものとして、だがまたそこにいつまでもその姿でとどまるのでなく、やがて必然的に対立物に変化せざるをえないものとしてとらえ、さらにすすんで、それ以前の、およびそれ以後の同類の諸事物、諸事態とのあいだの必然的な関係をとらえること、および同時にみてそれが相並存する事物、

あるいは個々の事物内部の諸側面と必然的な連関にあるものとしてとらえることによって、はじめてそれを真にとらえた、といいうることになる。〔三九ページ〕

それは同時に事物の發生史の必然的な営みをたどることになる。ヘーゲルは、自らの「概念の發生的叙述」の方法によって、事物の歴史性と有機的統一性ととの両方を一挙に明らかにしたのである。論理学でいえば、質、量、限度、本質と現象、同一性と区別、対立と矛盾、根拠と根拠づけられたもの、内容と形式、実体と偶有、全体と部分、可能性と現実性、偶然性と必然性、原因と結果、相互作用、概念、普遍・特殊・個別、判断、推理、分析と総合等々のさまざまな思惟形式が發生的に展開されるなかで各々の必然的な位置づけが明らかにされたのである。

そこで、ヘーゲルの論理学が従来の論理学（形式論理学）とその背景にある非歴史的、機械論的な世界観とに対して内容上新しいものだという点について、大体次の諸点があげられている。

第一に、ヘーゲルは、すべての事物はその矛盾によって變化を免れないという弁証法、量から質への転化の法則（有論、

対立物の相互制約の弁証法（本質論における様々な反省のカテゴリー）、發展と有機的統一性の弁証法（概念論）、全体として所与の形態の肯定的理解のうちに同時にその否定の理解をふくむといった弁証法、など弁証法を真に深く明らかにしたこと。

第二に、感覺的な直接的な認識からより内的で本質的な認識へとすすむ筋道（探求の過程）を明らかにし、そこでのふつうに科学で用いられている論理的なカテゴリーの位置を明確にしたこと。

第三に、事物の原理をなす最も基礎的な概念から出発してより直接的な認識にすすむ過程（第二にあげた筋道と反対のものすなわち叙述の過程）を明らかにしたこと。

第四に、形式論理学は一般に事物からは切り離された思考（概念の判断や推理）の形式のみを取りあつかい、それらの形式上の整合性を問題にするだけだが、ヘーゲルにとって論理学とは「思考が真理をとらえることを研究する」ものであった。（『小論理学』第二四節、岩波文庫参照）。したがって、「AはBであると同時にBでないということはできない」という無矛盾律や、「AはBであるかBでないかのどちらかであるか」という中間のものは存在しえない」という排中律など形式論理

学上の「論理的思惟の基本法則」（たとえば、ウィノグラードフ、クジミン著『論理学入門』第七章参照、一九五五年、青木書店）にたいして、ヘーゲルは、すべてのものは矛盾しており、対立する二つの規定のどちらでもある中間的なものはある、としたこと。（以上、一一三、一二三～一五、二四一ページ）

第五にあげられるのは、ヘーゲルの「普遍」についての新しい考え方である。この点はとくに詳しく論じられているので、節をあらためて触れてみたい。

### 三

形式論理学で、普遍とは、特殊の具体的な事物からその特殊性を抽象して得られる共通性としての普遍（類、実体、法則、原因など）、あるいは事物を分解して得られる構成諸要素としての普遍であり、ともに近代科学が用いる分析的方法によるものである。（二二六～七、二〇〇、二二七、二三〇～七、二四一～二七） このようにしてとり出された普遍から具体的なものを説明するとなると、「類に外的に種差を加え、法則に外的に初期条件を挿入し、構成諸要素に外的にそれらの結合条件を加え、部分原因を外的に綜合して、具体的な事物に到達す

るといふしかたで」（二四五ページ） 行うしかない。これが単純な分析的方法に対応する総合的方法である。（二二七～二三一、二〇〇、二二三〇ページ）

この考え方では、普遍、特殊、個別というものが、特殊は普遍に外部から規定を加え、個別はさらに特殊に、というようにしてつくられ、したがって普遍は特殊よりも、特殊は個別よりもいっそう外延が大きい、といった関係にすぎず、結局、普遍・特殊・個別といっても相対的なものにすぎないことになる。（二三二～三三）そして、何よりもそうした方法では、対象となる事物はそこに与えられたままで、それ以上に、いかにして何故事物がそこに、しかもほかでもないそうした姿でそこにあるのかということも、それが遅かれ早かれ消失する必然性も説明されないという制限がある。また第二に、この方法によっては事物を構成する諸要素が各々何であるかは明らかになっても、それらの間の有機的統一性、事物の全体がよくとらえられないという制限がある。（二二七～二三一、二二三〇～七ページ。なお著作集に収録されていないもので、住谷一彦・伊東光晴編『経済思想の事典』一九七五年十月、の中の「弁証法的方法」という項目を見田氏が書かれており、コン

パクトでわかりやすい。その四〇四ページも参照)

これに対して、ヘーゲルは、こうした形式論理学上の普遍(ならびに特殊)を批判して、普遍も一つの特特殊であり、他の特殊を自分で必然的に生みだす矛盾物であり、したがって自らを特殊化しつつ普遍のままでもどまってしまうという自らが生みだした特特殊なものと同様に存在し、一個の全体(個別)を総括するものとした。

この一見して奇怪な、詭弁に思える見方は、マルクスによって基本的に承認されており、たとえば、商品貨幣に対して普遍という位置にあるが、商品はその矛盾によって貨幣を生みだし、それと並んで流通する一特殊になるとともに、やはり全体を総括するものである、というような関係として生かされた。これは、普遍もより普遍的なものに比べてみて一つの特殊だという形式論理学的な相対的区別ではなく、普遍はいわば絶対的にそのまま特殊なのである。

資本の場合も、産業資本こそ資本一般であって同時に他の商業資本、利子生み資本を生みだし、それと並んである一つの特特殊になるとともにやはり全体を統括する「普遍的な照明」・「一つの特別なエーテル」(マルクス「経済学批判への序

説」であった。(二三三―五、二四一―四ページ)

見田氏は、この普遍、特殊、個別の弁証法的な同一性について、次の五つの意味を明らかにされている。

第一の意味は、普遍的なものそれは自身のうちに特殊なものを含包する矛盾物としてあり、それゆえさしあたりその事物を死滅させるのではなく発展させてそれを一つの特特殊なものにするということ。

第二は、普遍はそのまま同時に現実的な一つの特特殊であるという意味で、それが一つの特特殊であるからこそ他の特殊に転化・発展できるということ。

第三の意味は、以上のように普遍から特殊が生まれるが、この特殊は、形式論理学のように普遍に何か外から規定を加えて出来るものではなく、普遍が潜在的にそうであったものが実際にそうなったにすぎないから、それは同時に普遍である、ということ、すなわち特殊が普遍であるということ。

第四に、最初の普遍は、第二、第三の特殊の段階に転化しても自身であることには変りがないということ、自ら特殊化しながらそのなかで自己同一性を保つような動く普遍(ヘーゲルのいう主体、個別)は、特殊の全体と等しいという意味

である。

第五の意味は、こうした普遍と特殊との同一性なしには、事物の有機性がつかめない、ということである。(一三七～一四二ページ)

以上はヘーゲルの論理学の第三卷「主観的論理学または概念論」でのべられている弁証法の核心である。ヘーゲルの言葉で紹介すれば、たとえば次の如くである。「概念は普遍であるから、……まさにその点で概念そのものがまたそれ自身その選言肢の一つである。これに対して他の選言肢は、この普遍性がその特殊性の中に解消したものである。いいかえると、それは規定性としての概念の規定性であるが、この規定性の中では普遍性はあくまでも全体性<sup>トータル</sup>としてある。」(武市訳『大論理学』下巻、一一七ページ、岩波書店)

見田氏は、この弁証法がマルクスの『資本論』のうちに完全に受け入れられているとして、価値形態、貨幣の諸機能、資本主義のいっさいの特殊の現象、資本主義の自由競争段階と独占段階などの例をあげておられるが、そのうえで述べておられる次の言葉は、マルクスの方法の理解に大いに反省をうながすものだと思われる。

「したがってマルクスの方法について、たんにそれをもっとも抽象的カテゴリーからその矛盾によってより具体的なカテゴリーに内的必然的に上昇するものだ、というふうに理解し、いつているだけでは、ひじょうにふじゅうふんだといわねばならない。」(一四二ページ)

「この弁証法は、早くから見田氏によって強調されているもので、最初のものでして『資本論』における展開と分析(第三卷所収、そこではとくに上野俊樹氏の解説が参考になる)、そして『資本論の方法』第四章第二、三節(第四卷所収)がある。本卷所収の諸論稿ではヘーゲル論理学に即して説かれている点にメリットがあるが、経済学に即しての詳しい説明は、第三、四卷にあたりたい。」

#### 四

以上の大体五つの点が、見田氏によって、ヘーゲル論理学のうちの肯定的側面としてマルクスに受けつがれた、とされていることであろう。

しかし、ヘーゲルの方法は、①現実の事物の原理をなす萌芽としての概念から具体的なものを展開していく方法と、②抽

象的な要素から具体的なものを総合する方法と、③探求の過程に沿った方法（本稿二でのべたもの）と、これら三つのものを区別できず一つのものとしてあつかい（二三三ページ）、結局①の方法に集約させてしまうものである。それは、二の冒頭にふれておいたように、思考Ⅱ現実という観念論からくるものなのだが、そのために、哲学史の歩みに照応した認識の深まりも、実際に事物を分析し総合している合理的な認識過程も、すべて萌芽としての根本概念からの発生的展開という衣を無理矢理着せられている。これがヘーゲルのいう「絶対的方法」の根本的欠陥である。

見田氏は、このことにかかわって、論理学のように認識の発展をあつかう科学の方法と、経済学や生物学など現実の事物の発展をあつかう科学の方法とは異なる、という重要な点を指摘しておられる。すなわち、前者のような、経済学でいえば経済学史にあたる科学の方法は、最初の直接的、抽象的な認識を示すカテゴリーが現実の人間の経験や実践、直観と矛盾し、その矛盾を原動力としてより深い、具体的な認識を示すカテゴリーに発展するという方法でなければならぬが、それは現実の事物の発展のように萌芽としての根本概念の展

開という意味での発生的展開の方法とは異なる、というのである。（一九一―二ページ）この点は、たしかに、理論史のうえで最初のカテゴリーが後にくるものをふくんで自己展開していくようなものではない、ということを考えれば理解しうる。また、一般にすべてのものは矛盾を原動力として発展するといっても、その矛盾にはさまざまな区別があることを示しているという点で、矛盾論に対しても重要な指摘ではないかと思われる。ただここではむしろ、現実の事物の発生的展開の方法がいわゆる「論理と歴史との一致あるいは照応」（見田氏はこの一致と照応という二つの言葉を区別して使っているわけではないと思う）とどのように関係するのか、という問題が起ってくるが、これはもう少しあとにみることにしよう。

ヘーゲルのいう「絶対的方法」はこのように思考と現実を一緒にし、すべてのものを萌芽からの発展としてしかとらえないために、一つには、現実の事物の発展も、まるで釈迦の掌にある孫悟空のように、どこまでいっても自分にとどまるものにされ、事物の死滅と他者への転化は影を失ってしまう。いいかえれば、現実の矛盾を単なる対立物の統一と混同してしまうのである。（一四三―一七九ページ）

もう一つは、先にふれたように、思考の発展も結局ははじめから「絶対知」とされ、その発展の原動力も、真の内容も正しくとらえられない、ということであるが（一八七〜八ページ）、このことはより根本的に思考の独自の働きを認めないということにつながる。すなわち、われわれはその表象にあらわれる具体的な事物を分析し、ついでそれらを再結合してはじめて事物を深くとらえることができるのにもかわらず、ヘーゲルはこの方法をその制限性を理由に科学の方法として認めないことになる。ヘーゲル自身、論理学の中で分析と総合をおこないながら、これに概念の自己展開という形式を無理にあてはめるのである。そして、さらにこのことは、ヘーゲルが、分析と総合のみならず、一般に思考に対する客観的世界の絶対的な所与性までも否定し、直観や表象といった感性的認識をも否定する、ということである。（一四三、一九二〜六ページ）

以上がヘーゲル論理学の否定的側面としてあげられている点であるが、見田氏は、これらをはじめの方でふれたヘーゲル観念論の特質と二面的立場の産物としてよく整理されていると思われる。

## 五

こうしたヘーゲル論理学に含まれる二面的立場を批判して、弁証法を唯物論の基礎のうえにたてなおしたマルクスの方法とはどんなものかということについて、見田氏の見解は大変包括的で具体的であるが、先に整理した肯定面をのぞいた要点のみをうごにしよう。

マルクスは、まず思考と現実の世界とを区別し、前者は後者を絶対的に前提しているとみる。そのうえで思考が事物を認識する場合に、直観や表象（感性的認識）をさらに分析して本質を抽象し、そのものの概念をうる。（ここにはヘーゲルとちがって分析的方法の完全な承認がある。別の論稿では悟性的認識といわれている——「科学的真理に到達する筋道」著作集第二巻所収）そのうえで、それがそこにあつてそれ以外でないこと、またどのように生成し、発展し、死滅するのかを明らかにするが（理性的認識の段階）、そこでも、ヘーゲルのように概念が直観や表象を排除して自分で分析したり総合したりして具体化していくのではなく、つねに全体を表象しながらこれを分析して概念化し、それによって前の概念との必然的關係

を検証しそれをより豊富なものにしていくという道すじで現実を総体として認識するのである。叙述の過程Ⅱ方法はそれ自体たしかに根本概念からの発生的展開であるが、同時にその一步一步が探求の過程Ⅱ方法を純化した形で再現していく過程ともなっている。その限りでは歴史の歩みに一致しない、かならずしも必然的でないカテゴリーの進行がふくまれている。

また、ヘーゲルのいう弁証法的な普遍は、自分のうちに自身の特異な形態をふくんでいてそれが現われてくるというだけのものであったが、「マルクスの普遍概念は、……二重の意味で、すなわち対象そのものの矛盾性を反映しているという意味と、対象の絶対的知識でなく、多かれ少なかれ事実との不一致をもっているという意味で、他者を自分のうちにもっている点」で、ヘーゲルのそれとちがっている。資本の概念でいえば、「社会主義の概念に移行するという意味と、のちの資本そのものの発展とその研究の発展によっていっそう具体化され変容されるという意味との二重の意味で他者へ移行するような一つの有限の、二重の意味で歴史的な概念であるという点で」、ヘーゲルの普遍概念とちがっている。(一)

九六〇(七ページ)

見田氏は、このように、ヘーゲルの普遍概念と発展観の狭さを指摘しこれをマルクスが打破したといわれている。そしてこのちがいの背景には、現にあるものの定在の必然性だけでなく、その死滅の必然性を証明することが課題であったか否かのちがいがあるとされるが、直接には、矛盾の考え方のちがいと、もう一つ事物の一方的前提を認めるか否かということに大きな問題があるというのである。

マルクスの矛盾概念は、事物の肯定的存続・発展という一面、すなわち事物の恒常的再生産という面を不可欠としつつ、たんにそれだけでなく、そのものの発展の手段や条件が、「同時に、つねに、直接、間接、おそかれ早かれ」(二六一ページ)、自らを制限し、弱化し、事物の肯定的一面を打破して新しいものにとってかわられるという面をもつものとしてとらえられている。現実の事物の二側面(あるいは二つの事物)が対立の統一の関係(相互前提関係)にありながら、この統一そのものを破壊する関係にもある、だから「矛盾の二側面はいわば二重に対立している」(五〇ページ)——この矛盾論は見田氏にあって一貫しており、氏によれば、一方のものは他

方の発展を必然とする統一的関係にあるからこそ、それらの否定関係をも必然的に発展させざるをえず、やがて後者が主要となって統一が破壊され、新しい統一が生まれざるをえないことになるのである。(五二―三ページ) ヘーゲルは、このうち相互前提関係Ⅱ肯定的一面のみをみて、しかもこれを矛盾と同一視するから、その矛盾は結局同じ一つの本質のうちにとどまるものとなった。このことが先程の普遍概念、発展観の狭さとなったゆえんである。

こうした見田氏の矛盾論は、一般に事物の本性としての自己矛盾をよくつかまえていると思う。

もう一つの問題は、ヘーゲルでは有機的統一の諸モメントが相互に前提しあうだけの循環論におちいることを超越的統一者で解決しようとして結局神秘的な見地ににげこんだのに対し、マルクスでは、有機的全体を総括するものをあくまでそのうちの現実の一つのモメントだとみて、普遍・特殊・個別の弁証法を堅持するが、また、他方で、事物の一方的前提を認め(本源的蓄積など)て、歴史的または現実的な発生を明らかにした。(一七〇―九ページ) この点はヘーゲルにないことで、やはり事物の歴史性をとらえるうえで重要な指摘で

あろう。

以上のように、見田氏がヘーゲルの批判的克服としてのマルクスの方法として明らかにされた点はずじに豊富な内容をもつものである。著作集の第一巻では、「ヘーゲルのさかだちした形式が、その弁証法に内容上どのような制約を与えることになっているか」(二〇三ページ)が、もっと詳しく、その論理学に即して考察されているが、マルクスそのものの、さらに豊かな弁証法の具体化と分析的方法の駆使の例は、他の巻にあたらねばならない。

## 六

最後に、わたくしは、見田氏の見解に対して提起されているいくつかの問題点について、わたくしなりに考えて、今後の研究課題としたい。

第一に、見田氏が、マルクスの弁証法的方法を、分析的方法を基礎とした弁証法的方法といわれていることについてであるが、これまで整理したことからもわかるように、見田氏にあっては、分析と総合がどこまでもおこなわれることが弁証法を唯物論的に豊かにするものとなり、また弁証法による

分析的方法こそが単なる分析・総合とは比べものにならないほど事物を深く全面的にとらえるものとなっている。このことは、マルクスのヘーゲルに対する批判と弁証法の豊富化、および古典派経済学に対するマルクスの批判の例に明確に示されている。したがって、「分析と総合をおこなっておれば認識がおのずから進むかのような理解が人々のあいだで生まれている」(岩崎尤胤氏<sup>[11]</sup>)といっても、それは見田氏のものとは異質であろう。あるいは、見田氏の方法は「二元的方  
法」だ(許万元氏<sup>[17]</sup>)といった評価もあるが、商品や価値や資本の概念がまず表象の分析によって得られ、その後の展開もその一歩一歩が「直観や表象の概念への加工の産物」(マルクス)であることを考えれば、分析的方法は単純なもの、弁証法は先験的演繹、といった固定的観念こそ再考されるべきではなからうか。(なお鈴木茂氏<sup>[19]</sup>、向井俊彦氏<sup>[4]</sup>が参考になる)

またこのことは、探求の過程と叙述の過程との関わりという問題でもあるので、最近の一井昭氏の疑問にも一言触れておきたい。一井氏は、認識が「感性的↓悟性的↓理性的」と深化していくことは叙述の過程には妥当しいのではないか、といわれている。<sup>[6]</sup>一井氏がいわれるように、マルクスの

叙述が理性的段階に達してから行われるのは当然であるが、「思考の道」によって具体的なものを精神的に再生産することとは、「直観や表象の外または上にあつて思考する」(マルクス)ことではないのであるから、『資本論』には「探求過程が圧縮され、純化された形で示されている」(第二卷一五八ページ)し、それが一回かぎりではなくより高い次元でくりかえされながら全体としての認識が発展していく、というのが見田氏の考えではないだろうか。

つぎに、いわゆる「論理と歴史との照応」について見田氏はどう考えておられたのかという問題が出されている。(岩崎、一井両氏の前掲諸稿) 最初に明らかにしておくべきことは、見田氏は、論理の歩みがいかなる意味でも現実の歩みと一致しないとは一言もいわれていないのであり、見田氏がいわゆる「論理≡歴史説」と違うのは、現実の生きた事物を非歴史的、自然的なものまでも含めて徹底的に分析・総合し、しかも上向過程でもつねにそれを行うことを認めるか否かという点にあった、ということである。そこで、分析をするにも、同時的な連関や本質をとりだす場合や「可逆的、反復的な日常的、非歴史的過程」をとりだす場合などがあり、また、

資本主義の生産様式を概念的に把握するといつても、その発  
生史を明らかにする論理が必ずしもその客観的順序にしたが  
うものではない。(本源的蓄積の位置) 『資本論』は全体として  
資本の生成、発展、消滅の過程とそこでの歴史的な諸現象、  
形態、段階を明らかにするものだから、その大きな解剖学的  
な論理の歩みは歴史の歩みに照応するとともに、その枠の中  
の叙述もそうなっているが、その一步一歩がかならずそうで  
あるわけではない——これが見田氏の六〇年代に入ってから  
の一貫した考えであると思われる。(第三卷二五八―二六三―  
ジ、第四卷三三三―六ページ、第一卷二九―三ページ) この点では、  
第三卷の次の文が重要ではないかと思う。「マルクスの発  
生の展開のうちに、論理と歴史との一枚だけを、しかも一面化  
され、絶対化された形でみて、それが何よりも資本の概念か  
らの展開であること、その諸法則と諸契機、諸現象の概念的  
把握であるというその基礎的な特質をみないなら、それは表  
面的でかつゆがめられた理解だといわねばなるまい。」(『資  
本論』における展開と分析」第三卷一五九―六〇ページ。傍点——引用者)  
ここで「概念的把握」といわれているのは、単純な分析、総  
合によって諸契機の間の内的関係を取り出しながら、普遍的

概念から特殊的概念へと向上していく過程、ということ、  
「発生の展開の基礎」(第三卷一六〇ページ)とされているもので  
ある。したがって、いわゆる論理と歴史の関係という問題も、  
結局、分析の方法を基礎とする弁証法的方法と、古典的な分  
析的方法との違いという、ここでとりあげた第一の問題に帰  
着する。(第三卷二四四―七、一五五―一七五ページ) 先の問題と  
あわせて、今後、わたくし自身の課題としても深めていかね  
ばならない問題である。

なお、論理と歴史の問題に含まれる問題として、事物その  
ものの歴史とその認識の歴史とを区別し、論理学などは後者  
の歩みに照応し、前者とは照応しない、といわれていること  
は先にも指摘したが、これも重要である。(本稿四)

第三に、本巻におさめられている「マルクスの方法のヘー  
ゲル主義化」を中心に、二瓶敏氏が見田氏の見解に対して詳  
細な批判を行っている(一九七四年十月)<sup>[8]</sup>が、ここではその  
全てに触れる余裕はないので、いわゆる「再生産表式論」に  
おける恐慌の可能性とマルクスの恐慌の究極の根拠規定「生  
産と消費の矛盾」について、それも限定した諸点にのみ触れ  
ておくことにする。

まず、わたくしは、見田氏がこの論文で、表式上にいかなる恐慌の可能性もみてはならぬといわれている(七四、七五、八一ページ)のはまちがいだと考えている。そしてこの点では二瓶氏と一致する。それは、マルクスのいう「さらに発展した恐慌の可能性またはその抽象的な形態」(七二、七四ページ)を現行『資本論』第三部のものとみる(見田氏の見解)か、第二部第三篇のものともみるかの違いもあるが、単純な商品・貨幣流通の矛盾による恐慌の可能性が「表式」論で資本主義的な基礎を得ると考えるからである。ところが、注目すべきことは、この論文で見田氏が一面でこれを認めるようなことともいわれているということで、それはつぎの文である。

「一方またかりにここに〔表式上に——引用者注〕矛盾をもつた商品流通のことが言われているとしてもこのようにこの貨幣流通による媒介をもつて資本固有の諸矛盾を説明することは、資本固有の矛盾を商品流通一般の矛盾に解消し、恐慌の発展した可能性をもつとも形式的な可能性に解消してしまふというまちがいを冒すことであろう。」(七四ページ)『科学思想』第一号、一九七一年十月、五八ページ該当。傍点——引用者)

わたくしはここに傍点を付した部分の指摘は、まさに二瓶

氏らの矛盾把握の批判としての的をえたものだと考えるが、ここで重要なことは、見田氏自身が、のちに久留間敏造編『マルクス経済学レキシコン、恐慌Ⅰ、Ⅱ』の書評をされた際に、この「かりに」という限定をはずして、『資本論』第二部では「単純商品流通であらわれる恐慌の可能性がいつそう具体化され」、それは資本主義的生産の無政府性による、といわれていることである。(第五卷二六五—二七六ページ参照、なお第五卷にこの二つの書評に関する解説がないのは残念である。これは単に書評にとどまらず、恐慌論の方法についての重要な指摘が含まれている。)このことは、やはり正しい前進だとわたくしは思う。

「生産の無制限な拡大と大衆の制限された消費との矛盾」について、見田氏は、本巻所収「対立と矛盾」でつぎのようにいわれている。「生産の発展は消費の発展をその必然の条件としているのに、この社会では、剰余価値生産が生産の推進力となっているために、生産の発展は、その条件である消費の発展をむしろ最低限に抑止することを必然としている。だから生産と消費の一致(統一)が必然であるのに、それが偶然であるばかりかむしろその不一致が必然的である。……生産と消費はたがいに現実的に排除するもの、闘争するもの

となっている。これが矛盾である。こうした矛盾はおそらく早かれ解決されないではおかない。すなわち資本制的生産様式におけるその時々のある生産と消費の均衡状態（統一）は、その新しい均衡状態にとってかわられる。」（二八ページ）この見田氏のとりえ方では、やがて生産の無制限な拡大が否定されて恐慌がおこらざるをえないことがはっきり示されている。ところが、二瓶氏の場合「生産と消費の矛盾」は「一方が他方を絶滅しなければ止め矛盾」＝「敵対的矛盾」〔8〕（九八ページ）とは考えられていない——少くとも表式上では。これでは恐慌が一体起るのかどうかさえ明らかでないであろう。ここには単なる現実的な対立の統一と現実の矛盾を混同する考え方がみられる。

二瓶氏はまた、見田氏が「敵対的矛盾」だけを矛盾としている、と批判されるが、これは事実とちがっている。二瓶氏の批判が発表された一九七四年十月より以前に書かれた「ヘーゲル論理学と『資本論』」(4)（一九七二年八月発表）にはつぎのよう重要な指摘がある。「ただし、結果が原因をだめにする、といっても、相対的なことであって、過剰生産と過少生産、需要の増減、景気の昂揚と沈滞、生産価格をめぐっての市場

価格の上下の運動のように、たがいに誘発しあい、たがいにだめにしあう反対の方向の力によっておこる周期的な運動は、資本主義制度そのものをだめにするのでなく、ぎゅくにそれに一定の恒常性を与えるものであるし、また資本主義制度内部の諸形態や諸段階がその矛盾によって自分自身をだめにして他の形態、他の段階によってとって代わられることも、資本主義そのものをだめにするのでなく、反対にその発展のための条件である。」（二六—二七ページ）『経済』一九七二年九月号、一四九—一五〇ページに該当）そして、見田氏は、二瓶氏が「非敵対的矛盾」の例としてあげられる商品の交換過程の矛盾（槽田運動の例のある箇所、『資本論』第一卷第三章第二節冒頭）を引用して、「これは、資本主義制度の内部で、そのようになそれぞれ一定の安定性をもった発展諸段階をつくりだす矛盾の運動過程をさしたものにほかならない」といわれ、また「いままたような資本主義制度の矛盾のいわば肯定的な運動」といわれている。（一六三—一六四ページ）

このことは、恐慌の究極の根拠となる矛盾は、その対立の一項である「生産の無制限な拡大の衝動」が否定されざるをえない関係を含んでいるという点では二瓶氏流に「敵対的」である

が、より高いレベルから見れば、その矛盾がたえず解決されて景気循環という運動形態をとるといふことだと思われる。

ここで見田氏は、あきらかに矛盾を区別している。(ヘーゲルの弁証法がさかだちしているということについて)では現実の事物の「非自立的なもの自立はたしかに一つの矛盾だ」とされている。——二三、二一九ページ、および前掲の「書評」を参照)

二瓶氏はさらに、見田氏が一般に矛盾を事物の不均衡、困難、不可能と考えている、と批判されるが、見田氏が矛盾を一つの関係として規定しようとされていることは、明白ではないだろうか。

第四に、本巻所収の「論理的矛盾と現実の矛盾」を機に、現実の矛盾は形式論理学上の無矛盾律を犯すものか否かをめぐって、多くの議論が展開されている。〔9〕〔12〕〔15〕〔26〕 わたくしは、この論文がこれまで紹介してきた見田氏の矛盾論の

「論理的一般化」であり、矛盾の一面である対立物のたんなる統一が無矛盾律を本性とし、他の一面である相互排除の關係が論理的矛盾を本性とするので、この両面を一つのうちに含むのが矛盾であることを承認すれば、矛盾は論理的矛盾を犯すことなしには表わされないし、むしろそれを本性として

いる、という見田氏の結論は妥当なものだと思ふ。 解説者

(鈴木茂氏)が、「一部に誤解されているように、形式論理学の同一律、無矛盾律を単純に否定したのではなく、まして見田氏が、従来の自説を清算して、ヘーゲル主義に転向したことの、自己宣言でもない」(二七二ページ)といわれるのは、その通りであろう。見田氏の方法というと、分析的方法のみを強調するものだという先入見をもっている人だけが、弁証法的矛盾は形式論理学という論理的矛盾を犯すという見田氏の結論が、何か、従来とちがったことをいわれたように受けとるのではないか、と思われる。したがって、この問題も結局は、現実の矛盾のとらえ方とともに、弁証法的な分析的方法、というマルクスの方法の特質に対する理解にかかっているのである。

マルクスは、一八五八年一月のエンゲルス宛手紙の中で、経済学批判の「編集の方法」では、ほんの偶然のことから……ヘーゲルの論理学にもう一度目を通したことが大変役に立った」と述べ、「もし、もう一度こういう仕事をする時がきたら、ヘーゲルが発見したが同時に神秘化してしまった方法における合理的なものを、印刷ボーゲンの二枚か三枚で普通

の人間の頭にわかるようにしたいものだ」と書き送ったが、それは結局なされずにおわった。この手紙の書かれた時期の

(一九七七年七月脱稿)

経済学批判の手稿のみならず、初期のマルクスから晩年まで、

マルクスがヘーゲルから何をとりだし何を捨てていったかを

明らかにすることは、今日なお残された大きな仕事である。

こうした科学的社会主義の形成、発展史の研究そのものに、

ヘーゲル主義や反ヘーゲル主義の見地をもちこむことは正し

くない。見田石介氏の業績は、こうした見地の批判を通し

て、科学的社会主義の科学性を擁護し、発展させようとした、

重要な里程碑である。

また、見田氏の業績は、エンゲルスが『フォイエルバッハ

論』や『空想より科学への社会主義の発展』で述べた、哲学

に残る領域としての「思考とその法則についての学説——形

式論理学と弁証法」の研究を、実際にすすめたことでも、稀

有といえるべきである。そして経済学においては、その方法的

基礎にもとづく多くの研究を残された。

見田氏の科学的、実践的精神と研究に学ぶという姿勢で、

多くの人が本著作集にあたられるよう希望し、わたくし自身

もさらに深く学びとってさまざまな問題にとりくむことを願

う一人であることを表明して、この拙い書評を終えたい。

(資料)

〔本著作集に対する書評〕

〔1〕 横山正彦、『赤旗』一九七六年十一月十五日付。

〔2〕 高田太久吉、見田石介氏の人と学問——「見田石介著

作集」全六巻の刊行に寄せて——、『週刊読書人』第一一

五九号、一九七六年十二月六日付。

〔3〕 福島利夫、『資本論』の課題と方法——見田石介著作集

の刊行に寄せて——(経済学の立場から)、『創意』(京都大

学生生活協同組合院生理事會編集委員会発行)第四号、一九七七

年六月二十日。

〔4〕 向井俊彦、「分析的方法を基礎とする弁証法的方法とはど

ういうものか、『見田石介著作集』の紹介(哲学の立場から)、『3』と同じ。

〔5〕 平野喜一郎、学問・科学・弁証法、見田石介氏の業績に

よせて、「祖国と学問のために」(全学連機関紙)一九七七年六月八日付。

〔6〕 一井 昭、(書評)見田石介著『資本論の方法Ⅰ・Ⅱ』見

田石介著作集、第三巻・第四巻、『日本の科学者』一九七

七年六月、十二巻六号。

- [7] 福田静夫、一貫した弁証法探求、見田石介著作集の完結によせて、『学生新聞』一九七七年四月十三日付。  
〔見田氏の業績にかんする論稿—順不同〕
- [8] 二瓶 敏、再生産論と「二層発展した恐慌の可能性」——表式における「内在的矛盾」把握の否定論によせて——、岡崎・大島編『資本論の研究』一九七四年十月、日本評論社所収。
- [9] 北村 実、弁証法における「矛盾」の概念、『唯物論』第四号、一九七五年五月。
- [10] 岩崎允胤、見田石介先生の御逝去を悼む——その重厚な学風への敬慕をこめて——、『唯物論』第五号、一九七五年十一月。
- [11] 同、見田石介氏の科学方法論について、『哲学ノート』(大阪市立大学哲学研究会発行)、一九七五年十一月臨時増刊号。
- [12] 同、矛盾律と弁証法、『唯物論』第六号、一九七六年五月。
- [13] 井尻正二、分析と総合の問題——に対する一考察——故見田石介先生にささげる——、『唯物論』第五号。
- [14] 上野俊樹、竹内芳郎氏の佐竹恒有(見田石介)氏批判に対する反批判、『科学と人間』(日本科学者会議大阪支部哲学研究会発行)第四号、一九七六年十一月。
- [15] 有尾善繁、「矛盾」概念をめぐる若干の理論的諸問題について、『科学と人間』第三号、一九七五年十一月。
- [16] 鯉坂 真、弁証法的方法の諸問題(上)——許万元氏は見田石介氏をいかに発見するか——、『科学と人間』第四号、第五号、一九七六年十一月、および一九七七年六月。
- [17] 許万元、弁証法的方法の諸問題——見田石介氏の方法論的混乱——、『唯物論』第六号、一九七六年五月。
- [18] 須藤浩行、論理的矛盾と矛盾律について、『科学と人間』第四号、一九七六年十一月。
- [19] 鈴木茂、見田氏の弁証法的方法について、『科学と人間』第四号。
- [20] 橋本 剛、(研究短信)「矛盾」概念をめぐる一つの論議、『唯物論』第四号。
- [21] 同、「弁証法」理解の深化と厳密化をめざして、『唯物論』第七号、一九七七年三月。
- [22] 同、岩崎武雄氏の「弁証法」理解について——「論理的矛盾」と「現実的矛盾」とをめぐる問題によせて——、『唯物論』第六号。
- [23] 林田茂雄、弁証法的矛盾とは何か——論理的矛盾との関係、および機械的矛盾との関係において——、『唯物論』第六号。

[24] 牧野弘義、現実の矛盾と論理的矛盾をめぐる論争についてのノート、『現代と唯物論』(日本科学者会議京都支部哲学

部会弁証法研究会発行)第四号、一九七七年六月。

[25] 向江 強、歴史学における分析方法——見田石介氏の研究に学ぶ——、『科学と人間』第四号。

[26] 仲本章夫、論理的矛盾と現実的矛盾、東京唯物論研究会編『現代の唯物論研究』一九七七年七月、合同出版。

[27] 有尾善繁、弁証法的矛盾と論理的矛盾、『科学と人間』第五号。

[28] 見田石介、運動の源泉としての矛盾(遺稿)、『科学と人間』第五号。

〔著作集に収められていない見田石介氏追悼にかんするもの——順不同〕

有尾善繁、荒海に輝きし灯火消ゆ——亡き見田石介先生を偲んで——、『唯物論』第五号。

井尻正二、野尻湖での見田さんなど、『経済』一九七五年十一月。

上野俊樹、見田石介先生の科学と現実に対する態度に学ぶ、『科学と人間』第三号。

相沢秀一、もう一度逢いたかった、『経済』一九七五年十一月。  
船山信一、弁証法と分析論、見田氏の見解にふれて、「朝日

新聞』一九七五年八月二十日夕刊。

笹川儀三郎、見田石介先生のこと——思い出すままに——、『科学と人間』第四号。

福島利夫、見田石介先生の遺訓、「経済科学通信」第十四号、一九七六年一月。基礎経済科学研究所。

半田秀男、見田先生の逝去を悼む、『哲学ノート』臨増号、一九七五年十一月、大阪市大哲学研究会。

大橋隆憲、見田石介先生の思い出、『福祉大学評論』第十八号、一九七五年十一月、日本福祉大学企画課。

見田石介先生をしのぶ会、見田石介先生の急逝を悼む、「日本の科学者」第九三号、一九七五年十月、日本科学者会議。

平野喜一郎、見田石介先生の生涯と学問、『経済』一九七五年十一月。

鱒坂 真、田川邦夫、ヘーゲルから『資本論』へ、同右。  
久保田昌宏、教室での見田先生を偲んで、同右。

林 直道、見田石介氏を悼む、「赤旗」一九七五年八月十六日。

山崎隆三、見田先生を悼む、「大阪民主新報」一九七五年八月十六日。

橋本 剛、見田石介先生の御逝去を悼む、「唯物論」第二十四号、札幌唯物論研究会、一九七六年一月。